

学外研究制度成果報告書

2015年 7月 日

立命館大学長 殿

所属： 経営 学部/研究科 職名： 准教授 氏名： 吉田 満梨 印

(自署または記名・押印)

このたび学外研究を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

研究課題	新市場の形成過程におけるユーザーとの価値共創に関する研究			
研究期間	2014年 4月 1日 ～ 2015年 3月 31日 (12ヵ月間)			
滞在先国名 (複数ある場合は 全て記入してく ださい)	ニュージーランド	<input checked="" type="checkbox"/> 国外のみ <input type="checkbox"/> 国内のみ <input type="checkbox"/> 国内__ヵ月、国外__ヵ月		
研究日程 概要	期 間	滞 在 都 市 名	研 究 機 関 名	
	①	2014年4月 ～ 2015年3月	ダニーデン	Department of Marketing, Otago Business School, University of Otago
	②	年 月 ～ 年 月		
	③	年 月 ～ 年 月		
	④	年 月 ～ 年 月		
	⑤	年 月 ～ 年 月		
⑥	年 月 ～ 年 月			

1. 実施概要：研究方法や、上記研究日程に即して実施した概要を記述してください。

University of Otago では、Service Dominant Logic(Vargo & Lusch 2004 ほか)の中心概念である、Co-creation of value with customers に関して、同研究分野の主要な研究の一人である、David Vallantyne 教授との議論を通じて、概念的な整理と理論枠組みの検討を行い、日本で集めたデータの分析と組み合わせ、新たな論文の執筆を中心的な研究活動として行った。

現地に到着した翌日より研究室を与您いただき、文献のレビューを踏まえて、5月には最初の草稿の執筆を行った。以降、議論をしながら論文投稿のための修正を続けている。その暫定的な成果報告は、8月1日に San Francisco で開催された American Marketing Association のカンファレンスで発表し、有意義なフィードバックと SD Logic の提唱者である Stephen Vargo 教授を含む今後の研究につながる、アメリカの大学の研究者とのネットワークを得ることができた。

7月からは同大学の Dr. Leah Watkins と共に、欧米 (ニュージーランド) と日本の消費者の比較研究による、拡張的自己に関する研究にも着手した。学外研究中に、文献レビュー、両国での調査設計とニュージーランドでのデータ集中を完了し、現在は帰国後に日本で収集したデータを分析中である。また AMA の Summer Educator's Conference に参加するためにアメリカに向かう途中で7月下旬に日本に一時帰国をし、フィールドワークを通じたデータ収集、研究打ち合わせ、研究会への参加を行った。

10月より、Maree Thyne 准教授と、外国人旅行者に対するローカル住民の社会的距離 (Social Distance) の研究を開始した。ニュージーランドで調査設計を行い、12月にオンラインサーベイ・パネルを利用して日本の調査対象者1500名に対する大規模な質問紙調査を実施した。また、11月には一時帰国し、8-9日に明治学院大学で開催された日本消費者行動研究学会カンファレンス、および11月23日に早稲田大学で開催された日本マーケティング学会にて研究発表を行った。

帰国前には、3つの共同研究について、今後の進め方の打ち合わせを現地の共同研究者と行い、研究発表のスケジュールを確認した上で帰国した。現在もそれぞれの研究を継続している。

2. 研究成果の概要：研究成果について、概要を記入してください。

学外研究の全体を通して、研究課題に対する（１）経験的研究のための方法論的な精緻化、ならびに（２）研究成果の公表と研究コミュニティの構築、の２点を大きな目的として掲げていた。研究期間において、いずれの目的も達成できたと考えている。概要は以下のとおりである。

(1) 顧客との共創を通じた市場価値の創造モデルの検討

本研究が University of Otago での学外研究における中心的な研究である。顧客との価値創造活動を、市場における継続的な知識創造のプロセスとして捉えることで、近年の価値共創に関する多様な議論への統合的な枠組みを提案し、現実の価値共創のマネジメントのための示唆を導くことを目指した。本研究の成果は、8月1日に San Francisco で開催された American Marketing Association の Summer Educator's Conference で発表後、David Ballantyne 教授との共著として海外学術雑誌への投稿準備を進めているが、草稿としては完成したものの、未だ修正の途上であり、今年度中に論文として発表することを目指している。

(2) 拡張的自己に関する比較文化研究

University of Otago 滞在中に、Department of Marketing の Leah Watkins 講師と共同で始めた研究である。Belk (1988)による拡張的自己 (extended self) の概念にもとづき、高校生から大学生へのアイデンティティの形成過程にある大学の新生入学生を対象に、特定の所有物 (possession) が自己の形成に対してどのように貢献しているのか、をニュージーランド(欧米)と日本(東アジア)という異なる文化における independent/ interdependent self (Markus and Kitayama 1991)との関わりから、明らかにしようとする研究である。学外研究中は、文献レビュー、調査設計、ニュージーランドでのデータ収集を行った。引き続き、帰国後の5月から日本の大学生に対するデータ収集も行っており、分析結果の発表の場として、今年の10-11月に早稲田大学で開催される 2015 International Conference of Asian Marketing Associations (ICAMA) に応募している他、来年度の Association for Consumer Research にも投稿予定である。

(3) 外国人旅行者に対するローカル住民が感じる社会的距離の測定

University of Otago 滞在中に、Department of Marketing の Maree Thyne 准教授と共同で始めた研究である。もともとニュージーランドおよびオーストラリアで実施された研究の追試として調査設計を行い、質問票を検討、バックトランスレーションによる翻訳の後、12月にオンラインサーベイ・パネルを利用して日本の調査対象者 1500名に対する大規模な質問紙調査を実施した。その最初の分析結果は、今年6月19日にアジア太平洋大学で開催された 5th Advances in Hospitality & Tourism Marketing and Management (AHTMM) conference において発表し、有意義なフィードバックと今後の研究ネットワークを得ることができた。また、Journal of Travel and Tourism Marketing に対して、現在論文を投稿中であり、査読待ちの状態である。

(4) Effectuation とマーケティング研究の理論的接合

日本の共同研究者とともに学外研究以前から始めている研究であるが、学外研究期間中の時間を使って、今後の経験的な調査のための設計と、Sasasvathy(2008)による著作 *Effectuation* の訳書の翻訳・校正作業に充てることのできた。経験的研究は、2015年度新規採択にて、科学研究費(挑戦的萌芽研究)をいただくことができ、訳書『エフェクチュエーション—市場創造の実行理論』(加護野忠男監訳・碩学舎)として8月に出版予定である。

(5) マーケティングの研究方法としての事例研究の可能性

日本の共同研究者とともに学外研究以前から始めている研究であるが、学外研究期間中の時間を使って、以前より執筆を進めていた、ケーススタディの方法論についてのテキストを完成させることができた。『ケースで学ぶケーススタディ』(佐藤善信監修・同文館出版)として4月に出版された。

(6) 着物関連市場における新たなセグメントとその特性の分析

学外研究以前から始めている研究であるが、学外研究期間中の一時帰国を使って、インタビュー調査、データ収集を実施した。

【研究報告】

Mari Yoshida "Market Cultivation: How can a company link values-in-use co-created with the customers to its product development capabilities?", AMA 2014 SUMMER MARKETING EDUCATORS' CONFERENCE, AUGUST 1, 2014 SAN FRANCISCO, CA (2014年8月1日)

本條晴一郎・吉田満梨・大槻美聡「伝統産業における新たな消費者価値の形成—着物関連市場における新たなセグメントとその特性の分析」日本消費者行動研究学会 第49回研究発表大会 (2014年11月9日)

【著書】

佐藤善信監修、高橋広行・徳山美津江・吉田満梨著『ケースで学ぶケーススタディ』同文館出版、2015年。

【ワーキングペーパー】

吉田満梨(2014)「着物関連市場における新たなセグメントとその特性の分析」2013年度「未来の京都創造研究事業」研究成果報告書, 81-104頁。

氏名	吉田 満梨
----	-------